
不思議な縁

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

不思議な縁

【Nコード】

N0047B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

猫が取り持った恋のお話。何故かもてない大学生が困っている猫を助けると。ちょっと不思議な恋のお話です。

第一章

不思議な縁

堀達之は動物好きなく普通な若者だ。背は高く、二重の目が丸いのが印象的だ。そんなくありふれた若者だが他の者と一つ違うことがあった。

「彼女ができないなあ」

これであつた。仲間内でも一人だけ彼女がいないのだ。彼にとってはこれは唯一で最大の悩みでありコンプレックスであつた。合コンに出ても、女友達と会つてもお洒落をしても結局彼女ができないのだ。何をしても彼女ができなかつた。

「御前彼女まだなのかよ」

「はい」

先輩の河村さんにもそう返す。大学の一個先輩でバスケのサークルで一緒なのだ。

「これができないんですよ」

二人はキャンバスでだべりながら話をしていた。それぞれの手にジューズの缶がある。

「この前も合コン言つたんですけどね」

「駄目だったと」

「はい」

ふう、と肩を落として答える。

「また駄目でした」

「そこまで努力してるのにおかしいな」

「努力してますよ、本当に」

実際には努力しても人の縁だからどうしようもない部分はあるが。だがそれでも達之は努力していたのである。

「それでもどうにもならないんですよ」

「ふうん」

「先輩にも教えてもらってますけれどね」

「俺は普通に彼女いるからな」

河村さんはその一重の細い目を動かして言った。わりかし鼻が高くて色が白い。ただ少しばかり額が広い。

「何年も一緒なのが」

「いいですね、一緒なんて」

「羨ましいか？」

「勿論ですよ」

達之は本当に羨ましそうな声で言った。

「俺なんか生まれてからずっとですよ」

「ずっとか」

「彼女いないのは。小学校も中学校も高校も」

「普通小学校で彼女持つてる奴はいないだろ？」

「最近はいますよ」

「そうなのか」

河村さんはそれを聞いて顔を顰めさせた。

「最近のガキは違うな」

「進んでるんですかね」

「生意気なだけだ。俺だつてはじめて彼女ができたのは高一だ」

「でしたな」

これは本当のことである。河村さんも達之の前では偉ぶってはいるが実は高校生ではじめて彼女ができたのである。周りでは中学生でもう彼女がいるのもいたというのだ。

「それで小学生でか。何か頭に来るな」

本音であった。

「ガキの分際でな」

「それで俺ですけれど」

その小学生にも負けている達之が言った。

「どうすりゃいいですかね」

「それだけ努力してるしな」

流行の服を着て清潔にして。容姿も正直悪くはない。性格も闊達で人付き合いもいい。これで彼女ができないのが河村さんにとっても不思議であった。

「後は。運だな」

「運ですか」

「そうだ、足りないのはもうそれしかないだろ」

いささか無責任な言葉であった。

「俺はそう思うけれどな」

「はあ」

突き放されたみたいで心細くなった。それが返事にも表われていた。

「後は運任せだよ」

「心許ないですね」

「そう言わずに諦めないことだな」

「そうですか」

結局先輩には愚痴を聞いてもらうだけだった。彼は講義が終わり、サークルも終わるとそのまま家へ帰った。自宅から歩いて通っているのである。

「参ったなあ」

運任せとは心細いと言わざるを得なかった。

「こんなのだったら結婚もできないんじゃないか」

そうした不安すら抱いてしまう。深刻に、深刻に考えてしまっていた。

「まさかとは思っけれど」

だがついついそう考えてしまう。暗い考えになっていくその時であった。

「!？」

不意に横の公園にある木の上に気付いた。

「あれは」

見れば一匹の黒猫が降りられなくなっていた。どうやら昇ったの

はいいが怖くなつてそこから降りられなくなつたようなのだ。

「猫か」

「ニャー」

黒猫は弱々しい声で鳴いていた。

丁度その目と達之の目があつた。こうなつては動物好きの達之は動かないわけにはいかなかつた。

見ればその木は実に昇り易い木だつた。彼は運動神経もよかつたので易々と昇つた。こうして猫を救い出したのであつた。

「よし、もう大丈夫だぞ」

「アーオー」

猫は彼の腕の中で安心したように笑つていた。

「これからは不用意に高い木に昇るんじゃないぞ」

「ミャー」

わかつているのかいないのかわからないが猫は彼に鳴き声をかけてきた。そして彼が地面に下ろすと頭を足に摺り寄せてからその場を後にしたのであつた。

「これで一件落着かな」

猫の姿が見えなくなつてから呟いた。

「何はともあれ」

とりあえず猫は救つた。それに安心して家に歸つた。だがそれでも彼女がいなという悩みは消えることはなかつた。それとこれとは話が別なのであつた。

第二章

それから暫く経ったある日。彼はまた河村さんと話をしていた。またベンチに座ってである。

「今度の合コンだけだな」

「はい」

「俺の彼女にセツティングさせるから」

「先輩のですか？」

「ああ」

先輩はにこやかに笑ってそれに答えた。

「あいつが可愛い女の子連れて来るってさ」

「へえ」

「その子が丁度彼氏と別れたばかりでな。狙い目だぜ」

「そうですね」

彼氏がいなくなった直後の女の子が狙い目だというのは彼もよくわかっていた。そうしたことまでよく勉強しているのである。報われてはいないが。

「それでいいな」

「勿論ですよ」

達之にそれを断る理由はなかった。

「お願いしますね」

「ああ、任せとけ」

「それで時間は」

「今週の土曜だ」

「土曜ですか」

「俺とあいつが球場から帰ってからな」

「球場って」

「カープが遠征に来てるんだよ」

先輩はここで笑った。

「だからな。合コンは試合の後だ」
「そうなんですか」

実は河村さんは広島ファンなのである。親の実家が広島にあり、その関係だという。

「悪いがそれまで適当に時間潰しておいてくれよ」

「わかりました。それじゃ」

「今度こそ彼女ができるといいな」

「はい」

その言葉が非常に有り難かった。

「今度こそ」

「そうだよ、その意気だ」

そう言っただけを励ます。

「まっ、運も大事だけどな」

「やっぱりそれですか」

「天佑を待ちな」

「何かねえ」

そう言われると頼りなくなる。

「結局それなんですか」

「それ以外にもうないだろ」

河村さんの返事は素っ気無いものであった。

「違うか？そこまでやってよ」

「そうかも知れないですけど」

「それを信じて頑張るんだな。いいな」

「はい。ところで河村さん」

「ん！？礼ならいいぜ」

「いえ、あの」

「何だよ、一体」

急に口籠った達之に笑顔を見せる。

「またこの埋め合わせは」

「だからそんなのいって言ってるだろ」

屈託のない笑顔でそう返した。

「こつちだつて御前の彼女が出来た時見たくていいんだ」

「そうなんですか」

「そういうことだ。気にするなよ」

「わかりました。それじゃあ」

「ただな、毛はえ薬はそのうちな」

「そういえば」

ふとここで河村さんの額に目をやる。歳のわりには結構危ない雰囲気である。

「あの、またちよつと」

「気にしてるんだよ」

どうやらこれが河村さんの急所であるらしい。

「つたくよお、中学の時から言われてるんだよ」

「中学の時からですか」

「そうだよ、そつから段々とな」

「まずいんですね、やっぱり」

「前から徐々にな」

男にとつて最も怖いものである。

「親父も爺ちゃんもそつだからな」

「はあ」

「何かなあ、いい毛はえ薬ねえかな」

本気で探しているようであった。その顔を見ればそう言っていた。

「どつかにあつたら教えてくれよ」

「わかりました」

「御礼はそれでいいからよ」

結局御礼はすることになりそんなところで落ち着いた。先輩との話は終わり程無くしてその日がやって来た。先輩は話通り彼女と一緒にカープの試合を観に行った。

「カープもな」

行く前にふと寂しい顔になった。

「どんどん選手がいなくなるからなあ」

「金本ですか」

「兄貴だけじゃないしな」

今や阪神での人気者である。その逞しい身体と温かく、男気のある性格からファンに愛されている。これは広島時代からそうであるが阪神ファンの応援は別格だ。

「江藤も川口もな」

「はあ」

「何か俺がファンやってからあまりいい目見たことがねえんだよ」

「昔はそうじゃなかったらしいですね」

「いや、そのもつと昔も似たようなものだったらしいぜ」

「もつと昔って？」

「赤ヘルになる前だよ」

昭和五〇年より前である。この時代の広島東洋カープを覚えている人間はもうあまりいない。ノーヒットノーラン男外木場義郎の殺人光線と謳われた剛速球なぞ過去の歴史となってしまうている。どいうわけか彼のデッドボールを受けた田淵幸一の話はよく言われる。これは阪神ファンからであるのは言うまでもない。阪神ファンにとつては過去もまた現在と同じなのだ。それは記憶であり歴史ではないのだ。

「そんな昔のこと知りませんよ」

「俺だつて知らねえよ」

「実は先輩も同じである。」

「俺が生まれてすぐに山本も衣笠も引退したしな」

カープ黄金時代と言えばこの二人である。他にも選手は大勢いたがこの二人なくしてカープの時代は語ることが出来ないと言われている。

「最後に優勝したの見たのは何時だったかな」

「そんなに昔なんですか」

「御前は日本ハムファンだったよな」

「はい」

リーグが違うが。

「そっちはもつと凄いか」

「何回もチャンスはありましたけどね」

「そっちも何とかなるんじゃないかねえのか？」

「どうでしょうか」

優勝しそうでしないのが日本ハムである。いつそのこと一時の阪神の様に華麗とまで言える程の壮絶な弱さを見せて欲しいものだと思ったことがある。一種のマゾヒズムである。

「北海道に移ってもね」

「ちよつとは変わったじゃねえか」

「さて、どうでしょうか」

変わったという実感があまりないのが本音である。

第三章

「人材がねえ」

「うちよりいるだろ」

「そうですね」

「それに金もあるしよ。こっちなんか見事なまでに赤貧だぜ。そっちまで赤いんだよ」

広島が貧乏球団というのは球界ではあまりにも有名である。そもそも市民球団であり、資金には乏しいのである。その広島が強くなつたのはドラフト戦略に拠るところが多いが一部の変質者の傲慢な男の浅ましい下衆な私利私欲の為にドラフトが形骸化してからはそれもないのである。これでその男が何よりも大事にしているその球界の盟主だとか自称している愚かな球団が強ければよかつたのだろが所詮は猿は猿であり人間にはなれない。黄金時代なぞ何万年待っても来ない状況なのである。

「どうにかならないのかよ」

「お金はどうしようもないんじゃない？」

「結局育成か」

「はい」

とどのつまりはこうなる。これしかない。

「何かよお。育てた側から取られるし」

「まあまあ」

「今日も勝てるのかな」

「さて、どうなんでしょう」

「まあ観て来るぜ。それで機嫌が悪くても恨むなよ」

「わかつてますよ」

苦笑いをして応える。

「それじゃあそれで」

「ああ、じゃあ後でな」

こうして先輩は野球を観に行つた。達之は暫く暇になつた。
「さて、と」

これからどうしようかと思つた。

「ゲームセンターにでも行くかな。それとも本屋」

時間を潰す方法を模索する。

「それとも」

漫画喫茶か。どれも取りきたりなものである。

「何処に行こうか」

そう考えていたその時である。不意に目の前に何かが出て来た。

「!?!」

「ア~~~~オ」

「あれっ、御前」

達之はその目の前に出て来た猫を見て思わず声をあげた。

「この前の」

「ニヤ~~~~ン」

あの黒猫であつた。どういうわけか急に彼の前に姿を現わしたのだ。

「何でこんなところに」

猫はそれに答えない。そのかわりに彼の足に擦り寄ってきた。

「あつ、おい」

「一張羅だぞ、と言おうとしたがよく考えたら猫に言葉は通じない。止むを得なく猫が擦り寄るのを許した。」

「仕方がないなあ」

毛が付くのを我慢するしかなかった。猫はそれに構わず身体を摺り寄せてくる。どうやら結構人なつっこい猫であるらしい。彼を全く怖がらない。助けてもらったせいもあるだろうが。

「なあ御前」

「くう!?!」

言葉がわからないかと思つたらそうでもなかった。彼の言葉に応じて顔を上げてきたからだ。人の言葉にはちゃんと反応する猫であ

な家であった。

「ここが御前の家なのかい？」

「ナーーーーー」

彼を見上げて鳴く。そうだとやっているようである。

「そうか、ここが御前の家なのか」

「ニャーーーーー」

「飼い猫だったのか。それで新築の家となると」

引越して来た家だ。自分の家からは結構離れた場所にあるのでそれがわからなかったのだ。

「俺に自分の家を教えてくれたんだな」

「ニャーーーーー」

そうだと言っているみたいだ。

「済まないわ、わざわざそんなところまで」

「あら、モモ」

ここで後ろから女の子の声が出た。

「!?!」

達之はそれを聞いて後ろを振り返る。そこには長い、少し波がかった髪を今時に茶色に染めてラフなシャツにジーンズの女の子がいた。手にはバッグを持っていて。顔にはうっすらと化粧をしていた。

「先に帰ってたの」

「ニャーーーーー」

猫はその女の子の姿を認めると彼女の方へ駆け寄った。彼女の方もその猫を抱きかかえた。

「よしよし」

「あの」

達之は彼女に声をかけた。

「何!?!」

彼女もそれを受けて彼に顔を向けてきた。目のパッチリとした可愛らしい顔をしていた。唇が少し厚いのが印象的であった。それが何処かに肉感的なものを見せていた。

「その猫貴女の飼い猫ですか？」

「そうだけど」

彼女はそれに応えた。

「それが何か？」

「ニャーニャーニャー」

猫がここで彼に対して親しげな鳴き声を出してきた。

第四章

「!？」

「あれっ、珍しいわね」

女の子は自分の手の中にある猫を見てこう言った。

「モモが他の人にこんな声出すなんて」

「その猫、モモっているんですか」

「ええ、そうよ」

彼女はその言葉にも応えた。

「あたしの名前が桃子だから。そう名付けたのよ」

「そうなんですか」

「ア~~~~~オ」

女の子にモモと呼ばれている猫はまた達之に対して鳴いてきた。

やはり親しげな声であった。

「またなの」

女の子、いや桃子はそんなモモを見てまた言った。

「この子が家族以外にこんな声出すなんて珍しいわね。あんた何かしたの？」

「何かって」

「悪いことじゃないみたいだし。よかつたら言ってみて」

「はあ」

「ここじゃ何だったらあそこの公園でね」

「それじゃあ」

彼は桃子が指し示した公園に入った。そこで二人並んでブランコに腰を下ろしながら話をはじめた。モモは桃子の膝の上で丸くなっていた。

「この前ですけどね」

「うん」

桃子は彼の話の話を聞いていた。

「その猫、木から降りれなくなつてたんですよ」

「そうだったの」

「それで助けたんですけれどね」

達之は素直に述べた。

「それだけです」

「モモを助けてくれたのね」

「まあそうなりますね」

「有り難う」

桃子はそれに素直に礼を述べた。

「モモを助けてくれたなんて。そんなことしてくれたんだ」

「大したことじゃないですよ、別に」

達之は畏まつてそう述べた。

「別に、そんな」

「モモはね、家族の宝物なのよ」

丸くなつてしているモモの背中をさすりながら言う。見れば見事な毛並みだ。家の者にも大事にされているのだろ。

目を閉じている。それを見るとまるで寝ているようであった。

「本当はね、外にも出したくはないのよ」

「そうなんですか」

「家猫にしたかったけれど。モモがどうしても出たがっていたから」

よくある話である。もつともこれは猫にもよるが。一旦家猫になつてしまうとそれからはずっと家猫である。猫がその家の中を縄張りだと認識するからである。これはこれでいいのだ。

「それでね」

「へえ」

「女の子だし喧嘩も出来ないけれど。それでも出してあげてるの」

「そういうわけだったんですね」

「そつ、それでもやっぱりそんなことがあつたのね」

心配する目でモモを見ていた。

「この子、臆病だし」

本当にモモが可愛くて仕方がないのがわかる。

「そのままだと本当に危なかったわよ」

「まあ確かに」

「それを助けてくれて有り難うね。モモも喜んでるわ」

「ニャーニャーニャー」

ここで顔を上げてまた鳴いてきた。桃子の膝の上が余程気持ちいいのか上機嫌であった。

「モモも喜んでるし」

「だといいですけれどね」

「この埋め合わせとかしたいんだけど」

「今日はちよつと人と会う約束があつて」

「実は私ものよ」

少し苦笑いになつてこう述べてきた。

「あつ、そちらもですか」

「ええ。だからまた」

「はい」

ここは分かれることになつた。お互い約束があるのなら仕方ないことであつた。

「また縁があつたらね」

「ええ。じゃあ」

二人は別れた。桃子はモモを抱いたまま家へと帰って行く。一人になつた達之のところ丁度いいタイミングで河村さんから電話がかかつてきた。

「おつ」

達之はそれを受けてポケットから携帯を取り出す。携帯の色は鮮やかなブルーでこれにも気を使っていたのだ。

『おおつ、準備いいか？』

やはり先輩の声だつた。口調が明るい。

『そろそろ時間だぜ』

「あつ、もうそんな時間ですか」

腕時計を見ればそうであった。どうやら桃子とあれこれ離しているうちに時間が過ぎたようであった。丁度いいと言えば丁度よかった。

『じゃあ待ち合わせの場所だけだな』

「はい」

『駅前の喫茶店な』

「あそこですか」

『ああ。あいつが彼女を迎えに行ったからな』

「もうですか」

『そうさ。それで合コンはカラオケでな』

「わかりました。ところで」

『何だ？』

「カープ、勝ったみたいですね」

『おっ、わかるか』

それは彼の上機嫌ですぐにわかることであった。

『勝ったも勝った、大勝利だぜ』

河村さんの上機嫌は続いていた。

『新井のホームランに黒田が完封してな』

「へえ」

どうやら先輩にとっては会心の試合であつたらしい。新井や黒田のファンでもあるらしい。

『もう少しでノーヒットノーランだったんだけどな。惜しかったぜ』

「そうだったんですか」

『六回に打たれちまったからな』

「それってあまりもう少しいって言える状況じゃないんじゃ」

『おい、黒田だぞ』

先輩はその突っ込みにムツとなっていた。

『黒田の実力だったら運さえよけりゃ何時でもパーフェクトなんだ』

『よ』

「はあ」

『はあじゃねえよ。何なら今度来いよ』

「球場にですか!？」

「そこまで言われて思わず困ってしまった。」

「巨人のリーグが違うじゃないですか」

『ああ、そうだったか。だったら仕方ないな』

「ですよ」

これは何とか逃れることが出来た。内心ホツとした。広島だけでなくセリーグの試合自体に興味がないのだ。あるとすれば巨人が惨めに敗れる試合だけだ。それは観るだけで人々の胸に心地よいものを与える。かつて太宰治は富士には月見草がよく似合うと言った。巨人には無様な負けがよく似合う。

『まあ野球のことはこれ位にしてだ』

「はい」

『待つてるぜ、駅前の喫茶店でな』

「わかりました、それじゃあ」

『ああ』

これで電話は切れた。達之はそれを聞いて駅前に向かった。そして先輩が待っている喫茶店に向かった。白と黒の綺麗な看板の店がそこにあった。

第五章

この店は彼の馴染みでもある。綺麗な店で落ち着いた雰囲気もある。少し時間があればよくここで時間を潰す。紅茶が絶品でもある。店に入る。すると入り口のすぐ側の席に河村さんがいた。白い店の中の白い椅子とテーブルにいた。そこでコーヒーを飲んでいる。カップも白であるから黒いのはそのコーヒーだけであった。先輩のシャツまで白であった。

「よお」

手に向けて挨拶をしてくる。本当に今にも酒を飲みそうな程上機嫌であった。テーブルの上には真っ赤なあのカップの帽子まで置かれている。見ればこれも白ではなかった。赤以外に見間違えようのないはつきりとした帽子であった。

「しゃもじはないんですね」

「バッグの中だよ」

先輩は笑ってこう返した。

「メガホンもな」

どうやら一式持っているらしい。広島ファンにとってしゃもじとは実に古くから縁のあるものである。ヤクルトファンの緑の傘と同じだ。かつて阪神との試合では緑の傘が嫌になる程見られたものである。

「持ってるぜ」

「やっぱり」

「まっ、合コンの時は出さないから安心しろ」

「はい」

当然と言えば当然であった。いきなり野球の話をして戸惑う女の子が普通である。これが関西で虎の帽子ならいいが。間違っても兎の帽子は駄目である。彼女が出来ないどころでは済まない。

「じゃあ行くか」

先輩はすぐに席を立った。

「えっ、もうですか!？」

「もう時間だぜ」

河村さんは自分の時計を達之に見せて言った。

「そうですね」

「じゃあ行くか」

「わかりました。それじゃあ」

「コーヒー飲みそびれたな」

「ですね」

その言葉に思わず苦笑してしまった。

「俺は紅茶を飲むつもりでしたけど」

「ああ、御前は紅茶派だったな」

「はい」

「コーヒーも飲まないわけではなかったがどちらかと言うと紅茶が好きなのだ。この店では紅茶が美味しいこともあり飲むのはいつも紅茶である。」

「まっ、今日は酒だ」

先輩は笑いながら言った。

「カープも勝ったしな、楽しく合コンやろうぜ」

楽しく話をしながら店を出る。先輩は店を出るとすぐに携帯をかけた。

「あっ、俺」

「どうやら自分の彼女と連絡を取っているらしい。 94」

「あっ、そっちももうすぐか」

「うん」

河村さんの彼女らしき女の人の声が返ってきていた。

「そうか、じゃあいつものカラオケでな」

「わかったわ。それじゃあね」

「ああ」

これで電話が切れた。先輩は話が終わるとすぐに達之に顔を向け

た。

「こつちに来てるってよ」

「もうすぐ見えますかね」

「だろうな。まっ、カラオケまで歩いて行こうぜ」

「わかりました。じゃあ」

「ああ」

二人はそのカラオケまで歩いて行った。喫茶店からあまり離れてはいない。達之は歩きながら河村さんに声をかけてきた。

「ところでカラオケですけれど」

「何だ？」

「先輩歌うのってまたあれですか？」

「あれって何だよ」

「TMレボリューションですよね」

「まずはあれだよ」

先輩は上機嫌で答えた。

「あれですかつといくぜ」

「じゃあ俺はスピッツでも」

「相変わらずそれ好きだな」

「いい歌じゃないですか」

「まあな。それからTOKIOだよな」

「はい」

達之はTOKIOも好きなのだ。グループの中では山口が一番好きである。

「じゃあ俺はジャニーズはスマップでな」

「いつも思うんですけど中居巨人ファンなのがいいんですか？」

「あいつファン辞めたらしいぜ」

「そうなんですか」

「今じゃ阪神ファンらしいぞ」

「また茨の道ですね」

「馬鹿っ、今じゃカープの方がそうだよ」

「そうでしたっけ」

「昔は全然逆だったのによ」

先輩は顔を苦くさせていた。とにかくカープが好きな人である。

「九十一年が懐かしいぜ」

「そうなんですか」

「あの時はなあ。本当によかったよ」

河村さんがそう言ったところでカラオケボックスの前に着いた。

フリータイムとのことだ。カラオケボックスというのは不思議なもので田舎にあるものはいやに高い。だが都会、それもちょっとした街だとすぐに冗談みたいに安くなる。それが非常に不思議であった。

「そろそろ来るぜ」

河村さんは店の前で達之に対して言った。

「もうすぐですか」

「ああ、ほら来たぜ」

スカートの女の子とジーンズの女の子の二人連れがやって来た。

「!?!」

達之は片方の彼女を見て目を丸くさせた。

「あの」

そして河村さんに尋ねる。

「彼女達、ですよね」

「ああ」

先輩はそれに答える。

「俺の彼女何回も会ってるだろ」

「はい」

その通りだ。スカートの女の子は紛れもなく先輩の彼女であった。それは見間違えようがなかった。それに達之も彼女を見ては驚いてはいなかったのだ。

問題はもう一人だ。先輩の彼女の横にるジーンズの女性、それは何と桃子であった。

「お待たせ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

達之と桃子は互いの顔を見て呆然としていた。

「待ったかしら」

「いや、丁度今来たところだぜ」

河村さん達はそんな二人をよそに挨拶をしていた。長い髪に少し赤を入れた派手めの彼女である。大きな二重の目が印象的である。達之のタイプとは少し離れているが。

「おう堀」

先輩は達之に声をかけてきた。

第六章

「彼女だよ」

「はあ」

「モモちゃん」

先輩の彼女の方も桃子に声をかけていた。

「え、ええ」

そして達之と同じ様に桃子も啞然としていた。

「彼が堀達之君よ」

「彼女が西峰桃子さんよ」

だが二人はこの時点ではそんな二人に気付いていなかった。

「つておい」

最初に気付いたのは河村さんであった。

「御前どうしたんだよ」

「モモちゃん、どうしたの？」

そして次に先輩の彼女が気付いた。

「なあ久美」

そんな二人を見て河村さんは彼女に声をかけた。

「どうしたんだ、この二人」

「さあ」

先輩の彼女の久美もこれには首を傾げていた。

「何かあったのかしら」

実際に何かあった。だから二人は呆然としているのだ。

「まあいいか」

それでも河村さんは合コンをすることにした。ここまで来ておじ

やんというのは好きではなかったからだ。

「入ろうか」

「そうね」

久美もそれに頷く。そして店に入る。その時に二人に声をかけた。

「二人も早くいらつしやい」

「機種はハイパーダムでいいよな」

「え、ええ」

「あたしはそれで」

二人は呆然としたままそれに応えた。先輩達が店に入っても二人はまだ呆然として店の外で顔を見合わせていた。

「まさかさあ」

最初に口を開いたのは達之であった。

「用事つて。これだったんだ」

「それはこつちの台詞よ」

桃子も戸惑いながら応えた。

「何でここで」

「まさかとは思ったけど」

「こつちもよ」

とにかく二人は今こうして会っているのが信じられなかった。

「モモを助けてくれたけど」

「ここで会うなんて」

「ちよつと……」

戸惑いのあまり何と云っていいのかわかりかねていた。

「彼女、いないのよね」

「うん」

達之は答えた。

「君もだよね」

「ええ」

そしてそれは桃子も同じであった。

「そうよ」

「そうじゃないとお互い合コンなんて」

「出ないわよね」

「おい」

ここで店の中から河村さんの呼ぶ声がした。

「早く来いよ」

「あつ」

二人はそれを受けて顔を河村さんに向けた。その動作も同時であった。

「はい、今行きます」

「もうジューズも頼んだわよ」

久美も声をかけてきた。

「コーラでいいわよね」

「はい」

「それでいいです」

「じゃあ早く来いよ、もう歌うぞ」

「スミ君何歌うの？」

「ケミストリーにでもするかな」

「ビーズがいわよ、ビーズ」

「じゃあ久し振りにウルトラソウルいくか」

「あつ、いいわね」

二人はもう自分達で楽しみだそうとしていた。何はともあれ合コンははじまろうとしている。主役ということになって二人がそれに参加しないわけにはいかなかった。こうして二人は店に入った。合コン自体は互いの当たり障りのない紹介と後はジューズとビールを飲みながら、カラオケしながらのパーティーとなった。

「じゃあ次私ね」

「モーニング娘。だよな」

先輩達でもう盛り上がっていた。二人は主役である筈なのにどうにも大人しい。それにこんなところで再会するとは思わなかったの。何を話していいかわからなかった。それでもちよこちよこ話をしていた。

「猫、好きなのよね」

「うん」

達之は桃子の言葉に頷く。

「だからね。あの時」

「そうなんだ」

「黒猫も。好きだから」

達之は小さな声で言った。

「本当!？」

桃子はそれを聞いて嬉しそうな顔になった。

「そう言っつて貰えると」

「そうなの」

「ええ。だつて黒猫嫌いな人多いから」

不吉だというのである。なお大阪では黒猫はお客さんを呼ぶとして人気がある。こうしたことは地域差があつて一概には言えないものがある。

「モモつて可愛いでしょ」

「うん」

桃子の言葉に頷く。彼女の問いは賛成を求めているものであったが彼はそれには賛成であつた。

「黒猫嫌いななんて信じられないわ」

口を尖らせて言った。

「あんなに可愛いのに」

「黒猫だつて可愛いよね」

「そうそう」

「おい、次御前等が歌えよ」

しかしここで河村さんと久美が二人にマイクを渡してきた。

「俺達ですか」

「ああ。何かデュエットでもよ」

河村さん達はあえて二人に気を使つてきたのである。

「何かあるだろ」

「つていつても」

「ええと」

二人はあまりデュエットを歌つたことはなかつた。それを振られ

て少し困ってしまった。

「何がいいですかね」

「俺に言われてもわからねえよ」

「二人で選びなさいよ」

そう仕向けるのが二人の狙いであった。達之も桃子もそれに乗ってしまった。

「それじゃあ」

「何がいいかしら」

二人はそれを受けてナンバーを見て探しはじめた。それこそが河村さん達の狙いであった。

ナンバーが書かれたカタログを見ながら探す。そして一つ見つけた。

「これなんかどうかな」

「それがいいわよね」

「何選んだんだよ」

河村さんが二人に尋ねてきた。久美もその横でにこにこしている。

第七章

「モーニング娘。の曲を」

「娘。!?」

「娘。でデュエットなんかないわよ」

「いえ、これですよ、これ」

「ミスター・ムーンライトを」

「あっ」

「それいいじゃない」

河村さん達はそれ見て大きく頷いた。

「それでいったらいいわ」

久美が言う。河村さんも同意であった。

「御前にしちや面白い選曲じゃねえか」

「何か河村さん見ていると」

「ああん!？」

当然冗談であるが河村さんはその言葉を聞いて怒った顔をしてみせた。

「どういう意味だそりゃ」

「ですから」

「ああん!？一回よく聞いてみてえなあ」

達之につっかかってみせる。

「俺の何処を見てそれを決めたんだ!？」

「それはやっぱり」

「けど最近額狭くなってきてるじゃない」

「そうかな」

久美の言葉に自分の額を見上げる。

「禿げるの怖がる歳でもないじゃない」

「けど気になるんだよ」

禿げる奴は二〇代でも禿げるのだ。だから禿は怖いのだ。しかも

河村さんの家は代々若い頃からそうなのである。これで恐怖を覚えない男はそうはいないであろう。

「まあいいよ。それでムーンライト歌うんだな」

「はい」

「じゃあ今から入れますね」

「ああ」

「どうぞ」

二人はマイクを譲った。それから達之と桃子はミスター・ムーンライトを歌いはじめた。二人の息ははじめてにしてはやけに合っていた。そしてそれから先輩達とかわるがわる歌いながらカラオケで楽しく時間を過ごしたのであった。

「さてと」

店を出ると河村さんは二人に声をかけてきた。

「これからどうするんだ？」

これには二つの意味があった。また他の場所で合コンをするのか、若しくは二人はまた会うのか。二つの意味を含んだ問いであった。

「今日はもういいです」

「そうか」

最初の意味はこれでなくなった。

「ただちよつと」

「ちよつと？」

「私、堀君とお話したいことがあるんです」

「へえ」

河村さんは桃子のその言葉を聞いて目を少し細めた。

「じゃあ二人でじっくりとな」

「私達はお邪魔よね」

「つてあの」

達之は三人のやり取りに取り残されていた。何か言おうとするがそれはもう遅かった。

「じゃあな」

「また明日ね」

「はい、お疲れ様でした」

こうして先輩達は姿を消した。後には達之と桃子だけが残った。そこまであっという間であった。

「あのさ」

夜空には月だけがある。それが二人を照らし出していた。達之はその月夜にさつき歌ったモーニング娘。のミスター・ムーンライトを思い出していた。

「ねえ」

「う、うん」

そして桃子の言葉に頷く。

「ここじゃ何だからさ」

話を切り出してきたのはやはり桃子であった。

「公園。行く？」

「公園つてお昼の」

「そうよ。あそこならゆっくり話せるでしょ」

「そうだね。それじゃ」

二人は歩いて公園に向かった。そこまで思ったより早く着いた。もっともこれは達之の主観であり彼があれこれ考えているうちに辿り着いたのであるが。

二人はまたあのブランコに並んで座った。最初に口を開いたのはまたしても桃子であった。

「何かさ、あつという間だったね」

「そうだね、本当に」

そう感じていたのは達之だけではなかった。桃子も同じであった。

「家の前で会ってね」

「それでここに戻って」

「嘘みたい」

桃子はふとこう言った。

「モモを助けてくれた人と一日に二回も会うなんて」

「俺だつて同じだよ」

それは彼も頷くものがあつた。

「あれよこれよつて間に」

「合コンまでやって」

「歌、上手いんだね」

「大学じゃ声楽やつてるから」

「へえ」

「将来。音楽の先生になりたくて」

「ふうん」

何か桃子のことをはじめて聞いた。あれだけ色々話してはじめてであつた。

「意外でしょ。こんな派手な格好で」

「別にそうは思わないけど」

桃子に顔を向けて言った。

「そうした格好今じゃ普通だし」

「そうなの」

「俺はそう思うけれどね」

「わかつたわ」

彼の言葉に一先頷いたようである。

「それでさ」

「うん」

二人の話は本題に入ろうとしていた。

「何で。俺をここにまた誘つたの？」

「うん」

桃子はそれを受けて話しはじめた。その顔が月の光に照らし出されて黄色く光つて見えた。淡い光であつたが夜を明るくするには充分であり公園も彼女も照らし出していた。二人はその淡い光を出す月を見ていた。見ながら話をしていった。

「話聞きたくて」

「俺の話？」

「そうよ。モモを助けてくれたし」

「あれはね。俺動物が好きだから」

「昼と同じ理由ね」

「うん」

その言葉に頷く。

「それで君に会うとは思わなかったし合コンでもまた会って」

「それで今ここにもいて」

「思えば不思議な話だよね」

「そうよね。何かモモに案内されたみたいに」

「あの猫にかい」

「ええ」

「そういえばそうかも知れないね」

彼もそれに頷くものがあった。

「あたし決めてるんだ」

「何を？」

「モモ大事にしてくれる人なら付き合ってもいいって」

「付き合っても」

「そうよ。何か偉そうな言い方よね」

「まあね」

顔を見合わせて苦笑し合った。

「それに合コンでも一緒になったしさ。やっぱり縁があるんだろう
し」

「俺でいいの？」

「そつちこそあたしでいい？」

桃子の方も聞いてきた。

「いい加減なところあるけど」

「いいよ」

達之は言った。

「俺なんかでよかったら」

「そう、よかった」

桃子はそれを聞いてにこりと微笑む。その時だった。

「あら」

「ニャーニャーニャー」

そこにモモがやって来た。月夜の中に黒猫が一匹いた。モモの黒い毛は黄色い光を浴びて輝いていた。

「モモ」

「迎えに来たみたいだね、君のことを」

「うん、そうじゃないわ」

桃子には何故モモがここに来たのかわかった。

「お祝いに来てくれたのよ」

「お祝いに？」

「そうよ。あたしと堀君のね」

交際がはじまったことを。モモは祝いに来たのだ。人間ならこんなことが事前にわかれば何か得体の知れないものを感じずにはいられないがモモは猫である。それも黒猫だ。不思議な説得力があった。

「有り難うね、モモ」

「くう~~~~~」

モモは桃子の足に自分の身体を摺り寄せていた。まるで彼女を祝うかの様に。達之はそれを見て自分も祝われているのがわかった。

モモは達之を見た。そしてにこりと微笑んでいるように見えた。

達之はそんなモモの顔を見てわかった。これは全部モモが導いたことだと。二人を引き合わせたのはモモであったのだ。

（恩返しなのかい？）

モモに目で尋ねる。

（あの時助けたから）

けれどモモはそれには答えなかった。ただ桃子に身体を摺り寄せ達之ににこやかに笑っているだけであった。けれどそれで充分わかることであつた。二人と一匹はそのまま月明かりの下で揃って時間を過ごすのであつた。

不思議な縁

不思議な縁

完

2
0
6
・
7
・
1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0047b/>

不思議な縁

2008年11月7日06時31分発行